

## 『土佐日記』の和歌表現

### —万葉歌との関連をめぐって—

西山 秀人

Nishiyama Hidehito

#### 要 旨

紀貫之の和歌には、諸先学が指摘するように「万葉集」の影響が色濃く認められる。その傾向は『土佐日記』所載の和歌についても同断であるといえるが、『古今集』入集歌や『貫之集』所載歌に比して具体的な考察が立ち遅れているようである。本稿は『土佐日記』歌について万葉歌との表現的関連を検証することで、本作品における万葉歌撰取の具体相をより明らかにしようとしたものである。

キーワード：土佐日記 紀貫之 貫之集 万葉集 古今和歌集

#### 一、はじめ

『土佐日記』二月四日の記事は、「和泉の灘」の某泊で滞留を重ねる苛立ちを「この楫取は、日もえはからぬかたあなりけり」と激烈

な筆致で述べているが、それに続いて次の歌を載せている。

この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり。

かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、

(1) 寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ

といへば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

(2) 忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ

となむいへる。<sup>(1)</sup>

(二月四日)

両首とも亡児追懐をモチーフとし、拾えば憂苦を忘れられるものとされた「忘れ貝」を詠み込んでいるが、ここで注目したいのは両首の表現がきわめて万葉風であるという点である。該語は『古今集』

には見えないが、『万葉集』では十例ほどを探し得る。中でも諸注が挙げる、

同坂上郎女向<sup>レ</sup>京海路見<sup>レ</sup>浜貝<sup>一</sup>作歌一首

a 吾背子<sup>ル</sup> 恋者<sup>苦</sup> 暇有者<sup>拾</sup>而将去<sup>恋</sup>忘<sup>貝</sup>

(万葉集・卷六・雑歌・九六四／古今六帖・三・一八九七)

は、詠作事情、表現ともに(1)と酷似しており、明らかに撰取関係が認められよう。(2)は亡児を「白玉」に喩えているが、これも既説の

ごとく山上憶良による「恋<sup>二</sup>男子名古日<sup>一</sup>」歌三首」中の長歌、

b 世人<sup>之</sup> 貴慕<sup>七</sup>種<sup>之</sup> 宝毛<sup>我</sup>波<sup>何</sup>為<sup>和</sup>我<sup>中</sup>能

産礼<sup>出</sup>有<sup>白</sup>玉<sup>之</sup> 吾子<sup>古</sup>日<sup>者</sup>……

(万葉集・卷五・雑歌・九〇四)

を念頭に置いたものとみてよさそうである。もつとも、古今集時代にbがどこまで訓み解かれていたかは不明であるが、(2)と同様、亡児への思いを主題とし、かつ詠作事情も近いという点を勘案すると、(2)がbに依拠している可能性もあながち否定できない。その前提に立てば、(1)・(2)はともに万葉歌の骨格を利用して詠み交わされた歌ということになる。こうした趣向は『万葉集』もしくはその歌自体に精通していなければなし得ないものであろう。

『土佐日記』と万葉歌との表現的関連については、つとに岸本由

豆流『土佐日記考証』<sup>(3)</sup>、香川景樹『土佐日記創見』<sup>(4)</sup>などの旧注をはじめ、大久保正<sup>(5)</sup>・萩谷朴<sup>(6)</sup>・中西進<sup>(7)</sup>・菊池靖彦<sup>(8)</sup>・小町谷照彦<sup>(9)</sup>・品川和子<sup>(10)</sup>・長谷川政春<sup>(11)</sup>・水谷隆<sup>(12)</sup>・佐藤和喜氏らにより再三指摘されてきた。これを貫之歌の万葉撰取という問題にまで広げれば、加藤幸一<sup>(14)</sup>・青木太朗氏らによる精緻な表現分析も存する。しかしながら、先行研究

の多くは『古今集』入集歌や『貫之集』歌を対象としたものであり、『土佐日記』の和歌表現そのものに焦点を絞った論は存外少ないようである。本稿は諸先学の驥尾に付して、『土佐日記』所載歌について万葉歌受容の具体相を考察することで、その表現特性の一端を明らかにしようとするものである。

## 二、万葉もどきの歌

上掲(1)・(2)はいずれも意図的に万葉歌の用語・表現を受容したものとみてよいが、中でも(1)「寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ」については、一首全体の表現に万葉歌の影が揺曳しているといつてよい。

まずは初句「寄する波」についてだが、『古今集』をはじめ『貫之集』あるいは同時代歌人の家集からは該句の用例を探すことはできない。だが、『万葉集』を繙くと、

山跡道<sup>之</sup> 嶋乃浦廻<sup>尔</sup> 縁浪<sup>間</sup>無<sup>牟</sup> 吾恋卷<sup>者</sup>

(卷四・雑歌・五五二)

伊勢海<sup>之</sup> 磯毛動<sup>尔</sup> 因流<sup>浪</sup> 恐人<sup>尔</sup> 恋波<sup>鴨</sup>

(同・六〇〇、筭女郎)

c 石灑<sup>岸</sup>之浦廻<sup>尔</sup> 縁浪<sup>辺</sup> 刃尔来<sup>依</sup>者<sup>香</sup> 言<sup>之</sup>将<sup>繁</sup>

(卷七・譬喻歌・一三八八)

d 大乃浦<sup>之</sup> 其長<sup>浜</sup>尔 縁流<sup>浪</sup> 寛公<sup>乎</sup> 念<sup>比</sup>日

(卷八・秋相聞・一六一五)

可牟佐<sup>夫</sup>流<sup>安</sup>良<sup>都</sup>能<sup>左</sup>伎<sup>尔</sup> 与<sup>須</sup>流<sup>奈</sup>美<sup>麻</sup>奈<sup>久</sup>也<sup>伊</sup>毛<sup>尔</sup>

故非和多里奈牟

(卷十五・三六六〇、土師稲足)

之夫多尔能 佐伎能安里蘇尔

与須流奈美 伊夜思久思久尔

伊尔之敝於母保由

(卷十七・三九八六、家持)

安由乎疾 奈呉能浦廻尔

与須流浪 伊夜千重之伎尔 恋渡可

母

(卷十九・四二一三、家持)

のごとく、該句を詠み込んだ歌が散見されるのである。万葉歌では序詞内での用例が目立ち、該句を初句に据えた例は探せないが、該句が平安和歌に継承されなかったことを鑑みると、当該歌はあえて万葉もどきの表現を意図して該句を撰取したのではなからうか。

ちなみに、当該歌は「古今六帖」にも採られるが(三・貝・一八九六・つらゆき)「寄する波」の例としては他にも、

おほぶねのともにもへにもよするなみよるともわれはきみがま  
 にまに (五・頼むる・二九六二)

がある。これは万葉歌、

大船之 舳毛鱸毛 依浪 依友吾者 君之隨意

(卷十一・寄物陳思・二七四〇)

の異伝であり、『万葉集』諸本は「ヨルナミノ」の訓を持つ。その一方、『万葉集』の本文自体が揺れているケースもあり、たとえばc・dについては廣瀬本・類聚古集・古葉略類聚鈔が三句を「ヨルナミノ」と付訓する。古今集時代にどのような訓みが流布していたかは定かではないが、いずれにせよ「寄する波」が万葉色の強い、古風な詞句と受けとめられていた可能性は強そうである。本日記の文脈に即して解すれば、当該歌の詠者すなわち「船なる人」はそのことを十分認識した上で該句を用いたということになる。

さらに加えれば、第三句に見える「わが恋ふる」も、きわめて万葉的な詞句である。該句については『古今集』はもとより同時代の用例を見出だし得ないが、『万葉集』では西本願寺本の旧訓に拠る限りでも二十余例を採し得る。もつとも、

玉手次 不懸時無 吾恋 此具札志零者 沾乍毛将行

(万葉集・卷十・秋雑歌・二二三六、元暦校本 三句「わがこふる」)

玉だすきかけぬ時なくわがこふる時雨しふらばぬれつつもい

かん (古今六帖・一・時雨・四八九〇/人麿集)

我故尔 痛勿和備曾 後遂 不相登要之 言毛不有尔

(万葉集・卷十二・問答歌・三二一六)

わがこふる心をしらてのちつみにかゝるこひにもあはさらめ

やは (人麿II三三三・III三八七・IV九六)

のごとく、他本あるいは異伝歌が「ワガコフル」の訓を伝えている例もあるが、そのことは逆に当時該句が万葉的表現と認識されていたことを示唆していよう。おそらく当該歌は、

春雨之 不止零零 吾恋 人之目尚矣 不令相見

(卷十・春相聞・一九三三/赤人集)

天河 白浪高 吾恋 公之舟出者 今為下

(卷十・秋雑歌・二〇六一/赤人集/家持集)

といった万葉語の表現を意識しつつ、該句を撰取したのではなからうか。

二月六日条に見える次掲の歌も、これとよく似た趣向で詠まれているようである。

六日。滯標のもとより出でて、難波に着きて、川尻に入る。みな人々、媪、翁、額に手をあてて喜ぶこと、二つなし。かの船酔ひの淡路の島の大御、みやこ近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞいへる。

(3) いつしかといぶせかりつる難波濁葦漕ぎそけて御船来にけり  
(二月六日)

二句中の「いぶせし」について、長谷川氏は「平安和歌に詠まれることが珍らしい語。大伴家持の好んだ用語」と注している。たしかに、該語は古今集時代に詠まれた形跡がなく、つとに「考証」は万葉歌、

久堅之 雨之落日乎 直独 山辺尔居者 鬱有来

(卷四・相聞・七六九、家持)

を証歌として引いている。もつとも、該語の訓みに関しては種々の異訓が伝わり、たとえば、

隠耳 居者鬱悵 奈具左武登 出立聞者 来鳴日晚

(卷八・夏雑歌・一四七九・家持)

では、「オホシ」(廣瀬本)「おほくし」(類聚古集)「おほ、し」(神田本)などと揺れが見られる。しかしながら、

e 垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛 荒鹿 異母  
二不相而 (卷十二・寄物陳思・二九九一)

については、

たらちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずして

(拾遺集・恋四・八九五・人麿／六帖・二・親・一四一一・いべのおとくろまろ、同・五・わぎもこ・三〇八七にも重出／人麿集)

など諸歌集に採歌され、後世には『古今集』仮名序古注にも引かれている。とすると、eが早くから人口に膾炙していたとしてもさして不思議ではなからう。

もつとも、該語は万葉以後もつばら散文語として用いられていたようで、天祿三年(九七二)規子内親王前裁歌合の後日記序における「思ひ結びこめられたる女郎花は、なほ解けず、いぶせき心地す」をはじめ、『枕草子』には二例、『源氏物語』には四十余例が見出される。あるいは当該歌の「いぶせし」は散文語の撰取であつた可能性もあろうが、如上の表現傾向を勘案すれば、該語はやはり万葉歌を念頭に置きつつ詠まれたものとみておくべきではなからうか。

三句の「難波濁」も既説のとおり万葉以来の歌枕で、貫之は旧作においてしばしば該語を詠み込んでいる。ただ、該語は『古今集』に三例(うち一例は貫之詠)見え、忠岑・兼輔ら当代歌人の歌にも用例があることから、万葉歌の直接撰取は想定しにくからう。むしろ注目したいのは、四句中に見える「葦漕ぎそけて」という表現である。「そく(退く)」は「取り除く」意の他動詞だが、その背景には「考証」が指摘する、

安可見夜麻 久左祢可利曾氣 安波須賀倍 安良蘇布伊毛之  
安夜尔可奈之毛 (同・卷十四・相聞・三四七九)

柰 棘原荊除曾氣 倉将立 屎遠麻礼 櫛造刀自

(卷十六・有由縁雑歌・三八三二)

をはじめ、

吾背子<sup>ワガセコ</sup> 吾恋良久者<sup>ワガコフラクハ</sup> 夏草之<sup>ナツクサノ</sup> 苜除十方<sup>カウジトウモ</sup> 生及如<sup>オヒシケガド</sup>

(卷十一・寄物陳思・二七六九)

などの万葉歌が念頭に置かれていたのではないか。貫之が屏風歌詠作に際して、右例に見える「刈り退く」を

さはへなるまこもかりそけあやめ草袖さへひちてけふやくらさ

ん (貫之<sup>一三六</sup>、延喜十四年十二月女四宮屏風歌)<sup>99</sup>

のごとく撰取していることは、つとに『創見』が看破しているところである。なお、『古今六帖』『人麿集』には、

このごろのこひのしげくて夏ぐさのかりそくれどもおひしくが

ごと

(古今六帖・六・夏草・三五五二／人麿<sup>四〇五</sup>・<sup>三三四</sup>)

の例もあるが、これは万葉歌、

g 迺者之<sup>コノコロノ</sup> 恋乃繁久<sup>コヒノシゲク</sup> 夏草乃<sup>ナツクサノ</sup> 苜掃友<sup>カウジトモ</sup> 生布如<sup>オヒシケガド</sup>

(卷十・夏相聞・一九八四)

の異伝であり、右掲gにしても類聚古集・元暦校本・神田本は「かりそくれとも」の別訓を持つ。ともあれ、如上を勘案すれば、古今集時代において「退く」は万葉語として認識されていたと考えてよく、(3)はこうした耳慣れぬ語を用いることでより古風な表現を目指したのであろう。

なお、結句に見える「御船」も『万葉集』に多数の用例を探し得るものである。中でも、

難波津<sup>ナニハツ</sup> 美船泊農等<sup>ミフネトモノ</sup> 吉許延許婆<sup>キコノコトコ</sup> 紐解佐気豆<sup>ヒモトキサケマ</sup> 多知婆志利<sup>タチハシ</sup>

勢武<sup>セム</sup> (卷五・雑歌・八九六・山上憶良)

奈尔波都尔<sup>ナニハツ</sup> 美布柙於吕须惠<sup>ミフネトモノ</sup> 夜蘇加奴伎<sup>ヨソカヌキ</sup> 伊麻波许伎奴等<sup>イマハシケヌ</sup>  
伊母尔都气许曾<sup>イモニツケクソ</sup> (卷二十・四三六三・若舍広足)

は、「難波津」を航行する「御船」を詠んでいる点、当該歌との影響関係を想定したいところである。ただし、『土佐日記』には、「黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船返してむ」(十二月十七日)、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしたまへ」(二月二十六日)、「御船より、仰せ給ふなり」(二月五日)、「幣には御心のいかねば御船も行かぬなり」(同)といった例もあわせて見出だされ、いずれも楳取の会話文中に用いられている。記紀や『竹取物語』にも例があることを鑑みれば、散文語の利用という見方もできようが、上述の表現傾向を踏まえ、ひとまず万葉歌の影響を想定しておきたい。

以上、『土佐日記』二月四日・二月六日条の和歌を取り上げ、万葉歌との関連を探ってきたが、まず(1)については前引aの坂上郎女歌を下敷きに、種々の万葉表現を散りばめて一首をものした可能性が強そうである。貫之歌における万葉歌受容の例は数多いが、(1)の場合は眼目となる用語や表現を楳取するのみではなく、一首全体を万葉歌仕立てにするという大胆な試みがなされている。まさに万葉擬歌的な作風といつてよい。(2)はその趣向を踏まえた上で、憶良のbを念頭に置きつつ詠まれたのであろう。(3)は老女の歌であること意識して、あえて古めかしい表現に仕立てたのであろうが、その淵源が多く万葉歌に求められるところが興味深い。『土佐日記』という韜晦的な作品の中で、万葉表現が大胆に楳取されているという事実は、作者貫之が本作品において実験的な試みを行っていたこと

を示唆しているようにも思われる。次節ではさらに用語・表現レベルでの万葉歌撰取のあり様を見てゆきたい。

### 三、語句レベルでの撰取

前引の土佐日記歌は、まさに万葉もどきともいえるような詠風であったが、そこまで顕著ではないものの、万葉歌の詞句を撰取したかと推測される歌は少なくない。「考証」はおびただしい数の万葉歌を証歌として挙げており、以来、諸先学によって博搜精査され現在に至っているが、本節ではその中でも比較的蓋然性の高い例を挙げてみよう。

(4) わが髪カミの雪ユキと磯イソ辺ノの白波シロナミといづれイツレまさマサれりレリ沖ウキつツ鳥トリ守モリ

(正月二十一日・船君)

海賊襲来カイゾクシヨウライの恐怖コウフと航海カウカイの苦難クナンによつて「頭カミもみな白シロけ」てしまつた「船君」の述懐歌である。つとに峯岸義秋氏が指摘するように、

当該歌は、

おもオモしろくめシロクメでたタきキことコトをヲくらクぶルにはハるとハあアきキとトはハいイづヅれレまマされサれレり

（論春秋歌合・一・黒主）

そらソラにたタつツはハるルのかカすみスミとトわかワカこコひヒとトつきツキせセぬヌものモノはハいイづヅれレまマされサれレり

(忠岑IV九六・躬恒忠岑問答歌・躬恒)

など、当時流行していた問答歌の詠法を踏まえたものと思しい。また、萩谷氏が述べるように、白髪を雪に喩へる趣向も貫之詠には

まマまマ見ミらラれるルものモノである。このように一首の骨格自体は古今風であるといえるが、事物Aと事物Bの優劣を「沖つ鳥守」に問いかけるという趣向は、上掲問答歌の淵源をなす、

h 八ヤチ百ヒャク日ニチ往ユク 浜ハマ之ノ沙サ毛モ 吾ワガ恋コロヒニ二ニ 豈アニ不フ益カヤ歟ヤ 奥オホ嶋シマ守モリ

(万葉集・卷四・相聞・五九六・笠女郎)

に依拠しているよう。「拾遺抄」「拾遺集」には、

やヤほホかカ行ユクくクはハまマのノまマさサことコト我ワガがガこコひヒとトいイづヅれレまマさサれレりリおオきキつツし

まマもモりリ (抄・恋上・三〇〇・不知／集・恋四・八八九・不知)

と、その異伝歌が入集しており、また忠岑も、

寛平御時、中宮御屏風ニ、アマノカツキタルトコロ

コ、ロサシフカクミナソコカツキツ、ムナシクイツナオキツシ

マモリ (忠岑I二二・II六四・III一三二)

のごとく「沖つ鳥守」を詠んでいることから、万葉歌hは古今集時代から人口に膾炙していたとみてよさそうである。作中人物に即していえば、詠者たる「船君」もhの歌を知っていたということになる。

(5) 年トシごろゴロをヲ住スミみミしシとトころコロの名ナにしシ負オシへヘばバ来キ寄ヨるル波ナミをモあアはハれレとトぞゾ見ミる

(正月二十九日・女)

「昔、土佐といひけるところに住みける女」が、阿波国の土佐泊で地名に興じて詠んだ歌。三句「名にし負へば」は平安和歌に散見される常套句だが、四句中の「来寄る」については古今集時代の用例を探せない。ところが「万葉集」では、

奥波 来依荒磯乎 色妙乃 枕等卷而 奈世流君香聞

磯之浦尔イソノウラニ

来依白浪キヨシラナミ

反乍カヘリツツ

過不勝劣スキカテスレバ

キリニクユクフ  
 雑尔絶多倍

(卷二・挽歌・二二二・人麿)  
 (卷七・譬喻歌・一三八九)

をはじめ十余例が見出され、万葉語ともいへべき様相を呈している。  
 ちなみに、『考証』は、

i 住吉之スミノエノ

奥津白浪オキツシラナミ

風吹者カゼフケバ

来依留浜乎キヨシラハハマ

見者淨箱ミレバキヨシモ

(卷七・雑歌・一一五八)

の万葉歌を証歌として挙げており、i について諸本の多くは「キヨ  
 スル」と付訓する。が、元暦校本は「きよれる」の異訓を持ち、ま  
 たその異伝歌も、

すみよしの奥つしらなみ風ふけはきよれるはまをみればきよし  
 も (人麿 II 二〇二)

と、同訓を伝えていることを勘案すれば、古くから「キヨレル」の  
 訓みも流布していたのではなからうか。ともあれ、如上の考察によ  
 り、当該歌の表現形成に万葉歌が何らかの形で関わっていたことは  
 認めておいてよいだろう。

(6) 来と来ては川上り路の水を浅み船もわが身もなつむ今日かな

(二月六日・船君)

「淡路の島の大御(淡路専女)」が詠じた上掲(3)に対抗すべく、「船  
 君の病者」が「からくして」「ひねり出」した一首である。そもそも「船  
 君」は「もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知  
 らざりけり」、すなわち無風流で和歌に疎い人物であり、それゆえ

か上二句は難渋ともいえる詠みぶりである。三句以下は、

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれにけ  
 り (古今集・恋三・六七二・不知)

あらたまの年のをはりになることに雪もわが身もふりまさりつ  
 つ (同・冬・三三九・在原元方)

春はた、昨日はかりをうくひすのかきれることもなかねけふ哉  
 (公忠 I 七)

といった同時代詠の表現を切り貼りしたような印象だが、結句中の  
 「なづむ(泥む)」は耳慣れぬ用語である。『考証』は「浅小竹原  
 腰泥む 空は行かず 足よ行くな」(古事記・中・景行天皇・三五)  
 をはじめ記紀および万葉歌(卷七・一一九二、卷四・七〇〇)を証歌  
 として挙げる。『土佐日記』には他に「(二月)八日。なほ、川上り  
 になづみて」の例もあるが、これは当該歌の表現を踏まえての記述  
 であろう。果たして万葉歌の直接撰取を想定してよいかどうか、に  
 わかには判断し難いが、たとえは、

築羽根矣 卍耳見乍 有金手 雪消乃道矣 名積来有鴨

(卷三・雑歌・三三三・丹比真人)

従蒼天 往来吾等須良 汝故 天漢道 名積而叙来

(卷十・秋雑歌・二〇〇二)

父母尔 不令知子故 三宅道乃 夏野草乎 菜積来鴨

(卷十三・相聞・三三九六)

といった万葉歌が、後世、

つくはねのよそにのみしてありかねてゆきけのみつになつみつ  
 るかな (家持 I 二三五・II 一四九)

おほぞらをかよふ我すら何故にあまのかはらをなつみてぞくる

(古今六帖・一・七日の夜・一四四・人丸／人麿集／赤人集)

ちちははにしらせぬこゆゑみやげぢのなつものくさをなつみく  
るかも

(六帖・六・夏草・三五六一)

のごとく異伝歌として伝わっていることを鑑みると、これらを念頭に置いていた可能性もあろう。歌の心得は全くないはずの「船君」だが、歌学知識には秀でていたものか。しかし、それだけで秀歌を詠めるはずもなく、万葉語の悪しき使用例ともいべき駄作に仕上がってしまった。前文の「あやしき歌をひねり出だせり」、後文の「淡路の御の歌に劣れり」は、このことを含んでの評言であろう。

次の例は既成歌の上句をもとに、折にかなった下句を付けたものだが、ここでも万葉語との関連が看取される。

今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山の端逃げ  
て入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし海辺にてよ  
まましかは、(7)波立ちさへて入れずもあらなむ」ともよみて  
ましや。

(正月八日)

波線部は『古今集』および『伊勢物語』八二段に見える、

あかなくにまだきも月のかくるか山のはにけていれずもあら  
なむ

(古今集・雑上・八八四・業平)

の下句を引き、もしも海辺で詠むならば「波立ちさへて…」とでも付けたらどうかと述べる。傍線部の動詞「さふ(障ふ)」は「妨げる、邪魔をする」の意だが、同時代の和歌用例は所見がなく、品川氏が

指摘するように、<sup>83)</sup>

j 早敷哉 誰障鴨 玉梓 路見遺 公不来座

(卷十一・二三八〇)

などの万葉歌から撰取を試みたのではなからうか。ちなみに、廣瀬本は二句を「タカサフルカモ」と付訓し、「人麿集」も、

ハシキヤシタカサフルサモタマホコノミチワスラレテ君カキマ  
サヌ

(人麿三五九六)

と同訓を伝えている。<sup>84)</sup> 右のごとくjの異伝歌が見出されるという事実は、jが早くから巷間に流布していた可能性を示唆しているよう。それにしても「波立ちさへて」は、表現的には今一つこなれていない印象を受けるが、どうだろうか。

その他、卑見では次掲の歌についても万葉表現の撰取を想定できそうである。

(8) みやこ出でて君にあはむと来しものを来しかひもなく別れぬる  
かな

(十二月二十五日・主の守)

国司館で催された送別宴において、「主の守」すなわち新国司が「前  
の守」に対して詠みかけた歌である。二句「君にあはむと」は古今  
集時代には例がなく、おそらくは、

春霞 井上従直尔 道者雖有 君尔将相登 他廻来毛

(卷七・雑歌・一二五六・古歌集)

雲上尔 鳴奈流鴈之 雖遠 君将相跡 手廻来津

(卷八・秋雑歌・一五七四)

天霧相アマギリ 零来雪之フリクルユキノ 消友キエトモ 於君合常オノミヤハハコト 流経度ナガシメ

夕去者ユフサレバ 於君将相跡オノミヤアハハムト 念許憎オモフコソ 日之晚毛ヒノクラケモ 悦有家礼ウレシカガレ

(卷十・冬相聞・二三四五、人麿集)

などの万葉歌を踏まえたものと推察される。新国司の歌もまた当世風とはいえないが、その表現が万葉歌と重なるのは、あえて古風さ、拙さを演出するための作為であつたかと思われる。

(9) かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき  
 (正月十七日・ある人)

(10) 今日なれど若菜も摘まず春日野のわが漕ぎわたる浦になければ  
 (正月二十九日・ある人)

ともに四句中に「漕ぎ渡る」を詠み込むが、該語についても古今集時代の用例がほとんど探せず、「貫之集」に、  
 k夕つくよひさしからぬを天川はやくたなはたききわたらん

(貫之I四三二、天慶二年宰相中将屏風歌)

の一首を見出だす程度である。が、「万葉集」では、  
 粟嶋尔アハシマニ 許积将渡等オホシメトナミ 思鞆オモトモ 赤石門浪アカシメトナミ 未佐和来イマダサワケリ

(卷七・雑歌・一二〇七)

1 秋風之アキカゼ 清夕キヨユフ 天漢アマノツツミ 舟滂度フネヒツトコ 月人壮子ツキヒトツコ

(卷十・秋雑歌・二〇四三／人麿集／赤人集／家持集)

のほか計五例を数え、中でも1は右掲三家集にその異伝歌が収められてゐる。おそらく1は早くから人口に膾炙していた歌だったので

あろう。貫之歌kが「天の川」「漕ぎ渡る」の語を詠んでいるのも、1の影響と思しい。(9)・(10)が1をはじめとする万葉歌から該語を撰取したとしてもさして不思議ではなからう。

ただ、(9)については木村正中氏が説くように「宇宙的な拡がりの中に孤影悄然たる人間がたたずむ姿、同時に人間の孤独の中に無限の宇宙の開かれていく姿を描き出」した成功作であるのに対し、(10)は前文の「海にて「子の日」の歌にては、いかがあらむ」という評言どおり、いささか無理のある詠みぶりである。たとえ同語であつても、その用い方次第で歌の出来栄が大きく左右されることを示した好例であるといえようか。

(11) 生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しき  
 (二月十六日)

帰郷後の喧騒をよそに、「なほ、悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人」とこつそりと詠み交わした歌である。結句「見るが悲しさ」は同時代詠に所見なく、やや時代が下つて、

君がいにし方やいづれぞ白雲のぬしなきやどと見るがかなしき  
 (後撰集・哀傷・一四一六・清正)

や、「宇津保物語」所載歌に三例を見出だす程度である。ところが、「万葉集」においては、

筑紫船ツクシフネ 未毛不来者マダモコサレバ 予マダモコサレバ 荒振公乎アラフキキミヤ 見之悲左ミレノヒササ

(卷四・相聞・五五六・賀茂女王、結句 廣瀬本「ミシガ、ナシキ」・元暦校本・神田本「みるか、なしさ」)

難波辺尔 ナニハヘニ 人之行礼波 ヒトノユケレバ 後居而 オクレキテ 春葉採児乎 ワカナツムコフ 見之悲也 ミルガカナシヤ

(卷八・春雑歌・一四四二・丹比真人)

のごとく早くから用いられ、当該歌はその句法を踏襲したものであることが知られる。このように歌末を「…が悲しさ」で結ぶ詠み方は、他にも「妹が悲しさ」「行くが悲しさ」の形で見出され、万葉表現の一パターンとして定着している。『土佐日記』にも、

(2) なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るがかなし さ (二月九日、昔の子の母)

の例を見るが、この歌もまた広い意味で万葉表現を下敷きにしている。

以上、『土佐日記』歌における万葉歌摂取のあり様について考察を加えてきたが、一部の例外はあるものの、全体としては当世風の表現を意識しながらも今一つ垢抜けしていない印象を受ける。前節に挙げた(1)～(3)は万葉擬歌ともいべきもので、その巧拙はともかく、折にかなった歌という点では一応の成功を収めているよう。しかしながら本節掲出歌については、万葉語句のみが他の表現から浮き上がってしまったようなケースも少なくない。つまり、当世風の歌になり切っていないのである。このように歌作の拙さを印象づけるために、いかにも古めかしい語句を引いてきているのは、実に巧みな演出であるといえよう。

#### 四、万葉語「さざれなみ」へのこだわり

最後に、本日記中では最も繊細華麗とされる歌を挙げておこう。

ここに、相応寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに、柳多くあり。ある人、この柳の影の、川の底に映れるを見てよめる歌、

(3) さざれ波寄するあやをば青柳の影の糸して織るかぞ見る さ (二月十一日、ある人)

山崎停泊中に詠まれた一首で、川底に映る柳の枝を糸糸に、水面に立つ細波を緯糸に見立てて投影のイメージを詠じている。古今の歌風の一典型をなすものといえるが、唯一例外がある。それは初句に詠まれた「さざれなみ」という歌語である。「さざらなみ」であれば貫之も、

つるの池のほとりにある所

mさざら波よする所にすむつるは君かへん代のしるへなるらん

(貫之Ⅰ一八四、延長四年清貴民部卿六十賀屏風歌)

のごとく旧作で用いているが、「さざれなみ」については当該歌以外に平安時代の歌作例を見出だせないのである。

つとに『考証』が看破するように、該語は『万葉集』既出の歌語であり、

nは小浪 ハシレ 磯越道有 イソコセチナル 能登湍河 ノトセガハ 音之清左 オトノサヤケサ 多芸通瀬每尔 タギツセゴトニ

(卷三・雑歌・三二四・波多小足)

〇千鳥鳴 佐保乃河瀬之 小浪 止時毛無 吾恋者

(卷四・相聞・五二六・大伴郎女)

P 登能雲入 雨零川之 左射札浪 間無毛君者 所念鴨

(卷十二・寄物陳思・三〇二)

沙邪札浪 浮而流 長谷河 可依磯之 無蚊不惰也

(卷十三・雜歌・三二二六)

のほか八例を探し得る。ただし、その訓みについては揺れが見られ、たとえばn・oについては「サ、ラナミ」の異訓を伝える伝本も多い。西本願寺本では、

妹目乎 見卷欲江之 小浪 敷而恋乍 有跡告乞

(卷十二・寄物陳思・三〇二四)

阿胡乃海之 荒磯之上之 少浪 吾恋者 息時毛無

(卷十三・雜歌・三二四四)

のように、「ササラナミ」の訓も若干存してはいるが、これらは一  
 部伝本では「サ、レナミ」と付訓され、混沌とした様相を呈してい  
 る。また、pについては、

かきくもり雨ふる河のささらなまなくも人のこひらるるかな

(拾遺集・恋五・九五六・人麿)

ひぐらしの雨ふるかはのささら波まなくも人のこひらるるかな

(古今六帖・一・雨・四七五・或本そせい)

日のくもり雨ふるかはのささら浪まなくも君かおもほゆるかな

(人麿I一八四)

のごとく、その異伝歌が諸歌集に見えているが、いずれも「ささら  
 なみ」の訓を伝えている。

ちなみに、平安和歌において「ささらなみ」は上掲mをはじめ、

女につかはしける

q ささらなみまなくたつめる浦をこそ世にあさしともみつつわす

れめ (後撰集・恋五・九二六・読人不知)

r ささら浪まなく岸を洗ふりなきさ清くは君とまれとは

(大和物語・一七二段・黒主)

などに詠まれているが、q・rの表現はどうやら万葉歌pに依拠し  
 ている可能性が強い。おそらくpは早くから上掲異伝歌のような形  
 で流布していたのであろう。

このように「ささらなみ」が定着を見ていたにもかかわらず、当  
 該歌があえて古訓の「さざれなみ」にこだわったのはなぜだろうか。  
 本日記の文脈に即せば、詠者すなわち「ある人」の万葉語への傾倒  
 ぶりを示唆したものと考えられよう。この人物は複雑なレトリッ  
 クを操ることができると歌道に長けていたのだから、『万葉集』  
 についての知識もある程度は持っていたはずである。その人物こそ  
 作者貫之の自画像と捉えるのは拙速であるが、貫之自身が指向す  
 る和歌表現のあり方を当該歌で具現しているとみることが許され  
 よいだろう。当時古語と化していた万葉歌の詞句をいかに洗練され  
 た形で詠みこなすか、巧拙織り交ざった作中和歌において、当該歌  
 はその手本としての意義を担っているとも思われるのである。

## 五、おわりに

以上、本稿では「土佐日記」の和歌について、『万葉集』所載歌との表現的関連について考察を及ぼしてきた。万葉歌については異訓・異伝の問題もあり、煩雑さを避けるために十分な検証をなし得なかつたが、ひとまず次のような結論を得た。

I 万葉歌語ともいえる「忘れ貝」を素材とした(1)・(2)は、既説のごとく坂上郎女歌 a、山上憶良歌 b を念頭に置いての詠であろうが、とくに(1)は「寄する波」「わが恋ふる」といった万葉表現が散りばめられ、万葉擬歌的な詠風が顕著である。

II 淡路専女詠(3)についても、既説のごとく「いぶせし」「難波濁」「退く」など万葉ゆかりの語が詠み込まれているが、それらに加えて「御船」も万葉歌から摂取した可能性がある。これは作者のある種実験的な試みだつたのではないか。

III (4)・(2)については、万葉歌の用語・表現を表層レベルで取り込んだ例であるが、これらの多くは当代の和歌表現を意識しながらも、今一つ洗練されていない印象を受ける。おそらく、表現の古めかしさや拙さを出すために、あえて馴染みの薄い万葉語句を選択したのではないか。

IV (3)は古今的レトリックに彩られた当世風の歌だが、初句「さざれなみ」は万葉歌の古訓を摂取したものと思しい。当時は「さざらなみ」が普遍化しつつあったが、あえて前者を選んだのは詠者たる「ある人」、ひいては作者貫之の万葉歌への傾倒ぶりを示唆しているのではないか。

ちなみに、貫之が土佐守在任中に編纂した「新撰和歌」は、青木氏が述べるように「晩年の貫之の嗜好をうかがわせる恰好の資料である」<sup>93</sup>が、その中に万葉異伝歌もしくは類似歌が少なからず含まれていることは注目に値しよう。「新撰和歌」には、古今集には採られなかつた万葉表現の当時の享受の様相が残されている」とする青木氏の指摘は、『土佐日記』の和歌についてもある程度は当てはまるものであろう。

ただ、『土佐日記』が「新撰和歌」と明らかに異なるのは、言うまでもなく前者が虚構に根ざした作品であるという点である。作中人物が万葉もどきの歌を詠んだり、耳慣れぬ万葉語句をあえて詠み込んだりするのも諧謔を含んだ文学的操作であり、『新撰和歌』のように「花実相兼ねる」歌ばかりを並べようとしたわけではない。

かつて萩谷氏は「土佐日記は「あそび」の文学である」と述べたが、「貫之が晩年において彼の抱懐する歌の理論と知識経験といつたものを日記といふ様式と紀行といふ素材と戯曲的な構想とをもつて具体的に諧謔をこめて説き明かした啓蒙的な洒々落々たる試みである」とした氏の見解は、本日記歌を分析する上で今なお示唆に富んでいる。むしろ、「土佐日記」は歌論書を目論んで書かれた作品ではなからうが、作者の和歌観や表現意識が随所に現われていることは事実である。たとえそれが副義的なものであつたとしても、そうした歌論的な要素と作中和歌の表現とがどのような関わりを見せるのか、さらに分析を進めてゆきたい。

(注)

- (1) 以下、「土佐日記」の本文は『新編日本古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』（一九九五 小学館）、「土佐日記」は菊池靖彦氏校注）に拠る。
- (2) 以下、勅撰集・私撰集・歌合の本文・歌番号は『新編国歌大観』（角川書店 CD・ROM版 Ver. 2 二〇〇三）に拠るが、私に表記・清濁を改めた箇所がある。なお、『万葉集』については底本である西本願寺本の原文と旧訓を示し、歌番号は旧国歌大観番号に従った。
- (3) 『土佐日記古註大成』（一九三四 国文名著刊行会）所収。
- (4) 注3に同じ。
- (5) 大久保正氏「古代万葉集研究史稿（その二）—古点以前の万葉研究—」（北海道大学文学部紀要）一〇号 一九六一・一二。
- (6) 萩谷朴氏「土佐日記全注釈」（一九六七 角川書店）。
- (7) 中西進氏「統・万葉集の形成（上）—平安朝文献の意味—」（『成城文芸』五〇号 一九六八・六）、「統・万葉集の形成（下）—平安朝文献の意味—」（『国文学 解釈と鑑賞』四四卷二号 至文堂 一九七九・二）。
- (8) 菊池靖彦氏「古今的世界の研究」（一九八〇 笠間書院）、注1著書、『万葉集』と「紀貫之」（佐藤武義編『萬葉集の世界とその展開』一九九八 白帝社所収）。
- (9) 小町谷照彦氏「表現論の奥から」（『国文学 解釈と鑑賞』四四卷二号 至文堂 一九七九・二）、「古今和歌集と歌ことば表現」一九九四 岩波書店所収）。
- (10) 品川和子氏「土佐日記 全訳註」（講談社学術文庫 一九八三 講談社）。
- (11) 長谷川政春氏「貫之と万葉集—その接点をさぐる—」（『和歌文学の世界 第一集 論集 万葉集』一九八七 笠間書院）、「新日本古典文学大系
- 土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記」（一九八九 岩波書店）、「土佐日記」は長谷川氏校注）
- (12) 水谷隆氏「紀貫之にみられる万葉歌の利用について」（『和歌文学研究』第五六号 一九八八・六）、「紀貫之の和歌の表現と人麻呂の泣血哀慟歌をめぐって—紀貫之の作歌の一方—」（『文学史研究』三〇 一九八九・二）。
- (13) 佐藤和喜氏「土佐日記歌の古代性」（『日本文学』三七卷九号 一九八八・九、『平安和歌文学表現論』一九九三 有精堂所収）。
- (14) 加藤幸一氏「紀貫之の作品形成と『万葉集』」（『奥羽大学文学部紀要』一号 一九八九・二二）
- (15) 青木太朗氏「紀貫之の万葉撰取—新撰和歌を通して—」（『小論』一二号 一九九五・五）。
- (16) 『万葉集』の校異については『校本万葉集』（一九九四・五 岩波書店）を参照した。また、必要に応じて『元暦校本万葉集』（一九八六 勉誠社）、「類聚古集」（一九九二 臨川書店）もあわせて参照した。
- (17) 注11「新日本古典文学大系」参照。
- (18) 「難波潟」は「貫之集」に四例見え（貫之I二・三・三三・三五・三八・七七五）「古今・雑上九一六」、詞書を欠く五三八以外は「土佐日記」以前の作と判断しうる。
- (19) 以下、私家集の本文は『新編私家集大成CD-ROM版』（二〇〇八 エムワイ企画）に拠る。
- (20) 「紀氏の歌に、「沢べなるまこも刈そけ」とある、そけに同じ）。
- (21) 「淡路の専女」は正月二十六日条にも登場し、「追風の吹きぬるときは行く船の帆手うちてこそうれしかりけれ」の一首を詠むが、三句に「行く船」を据える、あるいは歌末を「うれしかりけれ」と結ぶ詠法は万葉歌（巻十二・二九二二、巻十一・一九九八）を嚆矢とするものである。

(22) 峯岸義秋氏『平安時代和歌文学の研究』(一九六五 桜楓社)第二章「土佐日記と問答歌」参照。

(23) 注6著書参照。

(24) 『新撰和歌』では「なぬかゆくはまのまさごとわが恋といづれまされりおきつしら澳」(二三三)の本文で採られ、「古今六帖」(四・恋・一九八八)もこれと同文である。

(25) 忠岑Ⅲ七九・Ⅳ一七二は結句「オキノシマモリ」。

(26) やや時代が下って源順は屏風歌で該語を用いている。「十月、アシロノモミチサヘキヨルアシロノテニカケテタツシラナミハカラニシキカモ」(順一七四、康保二年女五男八親王屏風歌)。拙稿「源順歌の表現―万葉歌との関連をめぐって―」(『日本大学文学部人文科学研究所 研究紀要』四四号 一九九二・九)を参照。

(27) この異伝歌は古今六帖にも見えるが(三・浜・一九二五)、四句はいと同様「きよするはまを」とする。

(28) 以下、散文作品の引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。

(29) 該語についても後年、源順が屏風歌で用いている。「カハ風ハサヘムカタナミヤマフキノチリユクミツヲセキヤトメマシ」(順一・三三四)。拙稿「源順の歌風について―天元二年内裏屏風歌を中心に―」(『日本大学第三高等学校研究年報』二六号 一九九〇・九)参照。

(30) 注10著書参照。

(31) 当該歌は『袖中抄』(六六)も載るが、二句は「たがさふるかも」である。

(32) 木村正中氏校注『新潮日本古典集成 土佐日記 貫之集』(一九八八 新潮社)参照。

(33) 「行くとても跡をとどめし道なれどふみ過ぐる世を見るが悲しさ」(蔵間中・七六七・仲頼妹)、「吹上にさそひし友の山ふかくたづねて君を見るが悲しさ」(国譲下・八九二・松方)、「もろともに生ひし桜のまつ枯れての

これらの枝を見るが悲しさ」(同・九五二・嵯峨院)の三首。

(34) 「ミシガ」の「シ」に見せ消ち、右に「ン」と傍書。その右に「或云ル」と傍書、見せ消ち。「カナシキ」の「キ」に見せ消ち、右に「サ」と傍書。

(35) 注15論文参照。

(36) 萩谷朴氏「土佐日記は歌論書か」(『国語と国文学』二五巻六号 一九四八年六月)参照。

(37) 平沢竜介氏は「土佐日記論―貫之の意図―」(『国文学研究資料館紀要』九号 一九八三・三)、「古今歌風の成立」一九九九 笠間書院所収)において、「確かに、歌論的要素も彼の表現したいものの一つであり彼は歌論的部分を展開する際、彼が日頃考えていた歌学上の問題を様々な工夫をこらして書き綴ったに違いない。しかし、それは土佐日記においてあくまで第二義的な意味を持つものであり、貫之が真に表現しようと思図したものはなかった」と述べている。

〔付記〕 本稿は上田女子短期大学助成費による研究成果の一部である。また、本稿は信州平安文学研究会平成二十二年十二月例会での発表に加筆補正を施したものである。席上、西一夫氏より上掲(2)の「白玉」の比喩については、bの憶良詠よりも『万葉集』巻七・譬喩歌の「寄レ玉」詠、たとえば「安治村 十依海 船浮 白玉採 人所知勿」(二一九九)等の影響を想定したほうが穏当ではないかとの指摘を賜った。たしかに、巻七には親に傳かれている娘を「玉」に喩えた歌が散見されるので、あえて憶良歌との関係性に拘泥しなくてよいのかもしれない。この点については改めて検討してみたい。貴重なご教示を賜った会員諸氏にあつく御礼申し上げる。